霞 ―2015年度冬季展示室だより―

土浦市立博物館

平成28年1月5日発行(通巻第33号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々のくらし」を総合テーマに、季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞（かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(33) 古写真「土浦市立郷土資料館」

目　次

○古写真･絵葉書にみる土浦(33)・・1
○博物館からのお知らせ・・・1
【館長講座及び展覧会と催し物等】
○古代の鉄製農具(古代)・・・・・・・・・2
○土浦にあった五重塔(中世)・・・・・・・3
○飲み水をもとめて(近世)・・・・・・・・4
○土浦中学校での軍事教練（近代）・・・5
○市史編さんだより・・・・・・・・・・・6
○地域と博物館・・・・・・・・・・・・・7
○ 霞短信「子ども用はたおり機の製作」･･･8
○コラム（33）・・・・・・・・・8
○情報ライブラリー更新状況・・・8

昭和 50（1975）年 11 月 1 日に開館した土浦市立郷土資料館です。木造総二階建ての旧陸軍憲兵(けんぺい)分隊跡が利用されました。門柱には真新しい表札が掲示されています。昭和 63 年の市立博物館の新築開館にともない、十余年の歴史を閉じました。

【情報ライブラリー検索キーワード「役所」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座（茂木雅博館長）★★

1 月 17 日（日)、2 月 21 日（日）午後 2 時～3 時 30 分

テーマ：「常陸における古代の織物」　会場：博物館視聴覚ホール

★★参考展示「昔のくらしの道具」★★

1 月 5 日（火）～ 1 月 31 日（日）

小学 3 年生の校外学習に合わせ、昔の人が使ったくらしの道具をご紹介します。

★★どんど焼き★★

1 月 16 日（土）　午前 11 時点火、受付は午前 9 時～11 時 30 分

会場：桜川河川敷（学園大橋下）

正月飾りを燃やし 1 年間の無病息災を祈ります。先着 200 名にお餅を配布します。

★★はたおり作品展★★　**2 月 20 日（土）～2 月 28 日（日）**　※詳細はホームページをご覧ください。

はたごしらえ講座受講生と、はたおり伝承グループ「綿の実」「むいむいの会」による作品展です。

はたおり体験もできます。

★★第３７回特別展「まちのしるし―しるしが語る土浦の近代―」★★

3 月 19 日（土）～5 月 8 日（日）　※関連イベントの詳細はお問い合わせください。

下記講演会はいずれも午後 1 時 30 分～3 時、会場は博物館視聴覚ホール

①3 月 20 日（日）「江戸の酒と似印(にせじるし)」講師：岩淵令治氏（学習院女子大学教授）

②4 月 16 日（土）「近世の醤油醸造業と印」講師：石崎亜美氏（国立公文書館）

③5 月　1 日（日）「店(たな)のしるし」講師：豊田満夫氏（豊田コレクション意匠研究所）

★祝日開館します★

・1 月 11 日（月）成人の日
・2 月 11 日（木）建国記念の日
・3 月 21 日（月）春分の日

★休館のお知らせ★

・毎週月曜日
・1 月 12 日（火）
・2 月 12 日（金）
・3 月 22 日（火）

★特別展準備のため無料開館します★

・3 月 12 日（土）～13 日（日）
展示室 1・東櫓
・3 月 15 日（火）～18 日（金）東櫓のみ

博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

２０１５年度　冬季の展示資料解説①　古代

古代の鉄製農具

―鎌（かま）と鋤（すき）―

奈良時代や平安時代の古代の遺跡を発掘調査すると、土器などとともに茶色に錆（さ）び付いた鉄製品が出土することがあります。これは、今から千年位も前に暮らした人々が使用したものです。

古代の遺跡から出土する鉄製品には様々なものがありますが、その中に、今回ご紹介する農具に分類される鎌や鋤と呼ばれるものがあります。写真は、市内東部のおおつ野に所在した石橋北遺跡や尻替（しりがえ）遺跡から見つかったものです。鎌は刃先がやや曲がることから曲刃鎌（きょくじんがま）と呼ばれ、鋤はその平面形態がアルファベットの「Ｕ」の字に似ていることからＵ字状鋤先（すきさき）とも呼ばれています。それぞれは市内でも全体の形が理解できる良好なもので、大きさは鎌が長さ 22.5 ㎝、鋤は長軸の長さが 22 ㎝のものです。いずれも平安時代（９世紀代）のもので、鎌は竪穴住居跡から出土し、鋤は火葬墓（かそうぼ）に副葬されていました。

農具のなかでも収穫具や伐採具とされる鎌については、多くの方がその形や使い方をイメージできるものと思います。一方の鋤については耕作及び土木用具とされ、現在は見聞きすることがあまりありませんが、足で踏んで土を掘り起こすスコップ（シャベル）に類似するものです。

古代の遺跡から出土する鉄製の鎌や鋤は、本来は棒状の柄に取り付け使用することで、その道具の機能が発揮されるものです。出土した鉄製品は鋭い刃先の部分であり、柄は取り外されたり、腐朽（ふきゅう）したりして残っていません。本来、鎌は根元を柄に差し込んで固定して使用し、鋤はＵ字形の刃先の内側がソケット状となり、そこに柄をはめ込んで用いました。

市内の遺跡から出土した鎌や鋤を調べると、鎌は６ヶ所の遺跡で合計 16 点が出土し、鋤は４ヶ所の遺跡で合計４点が出土しており、両者に出土数の明確な差がみられます。この傾向は市内のみならず、他地域でも確認されており、道具の使用頻度や所有形態の違いが反映されていると言われます。

このような鎌や鋤は、現在も農具として使用されており、地味ではありますが力強く生き続ける息の長い道具であることは間違いありません。　（関口　満）

鎌（石橋北遺跡出土）

鋤（尻替遺跡出土）

２／13（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも古代コーナーに展示） ●石橋北遺跡出土の刀子（当館所蔵） ●石橋北遺跡出土の穂摘具（当館所蔵）

２０１５年度　冬季の展示資料解説②　中世

土浦にあった五重塔（ごじゅうのとう）

―般若寺（はんにゃじ）の文字瓦―

市内宍塚（ししつか）の地には、静かなたたずまいをみせる般若寺があります。鎌倉時代建治元（けんじ）（1275）年の年号が刻まれた銅鐘（どうしょう）（国指定重要文化財）、建長（けんちょう）５（1253）年に建てられた結界石（けっかいせき）、木造釈迦如来立像（もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう）（ともに県指定文化財）などが、般若寺の歴史を今に伝えています。

こうした貴重な文化財のなかにあってはあまり目立たないかもしれませんが、地中に埋もれていた資料も、般若寺の歴史を語るうえで欠かせません。昭和 61（1986）年、般若寺の北側と西側で発掘調査が行われ、瓦や土器・陶器など中世の遺物が多数見つかりました。そのなかに「寺五重塔瓦也」と記した瓦があります。中世般若寺の景観を知る貴重な資料です。

「寺五重塔瓦也」という文字は、平瓦（ひらがわら）と呼ばれる平らでやや湾曲した瓦の内面（凹面）に記されています。ただし、その文字は左右が反転したいわゆる鏡文字（かがみもじ）で、文字部分が高くなった陽刻（ようこく）という形状を呈していることが特徴です。瓦を作る工程は、粘土から形を作る成形（せいけい）という段階と、それを高温で焼く焼成（しょうせい）という段階に分かれます。湾曲した瓦の内側に文字があり、しかも陽刻であるということは、瓦を成形する際に用いた凸型の木製台に文字を彫り、その上に粘土を置いて上から叩き締めたことを示しています。鏡文字になっているのは木製の台に文字を正字で刻んだためで、瓦には反転して文字がうつります。

ほかに「般若」と陽刻された瓦の破片も見つかっているので、もともとは「般若寺五重塔瓦也」と記されていた可能性があります。成形する台に文字が彫られているので、この瓦は量産されたとみてよいでしょう。それは、文字が示す通り、般若寺に五重塔を建てる際であったと考えられます。瓦の厚さが 1.5～2 ㎝とやや薄いことも、瓦を大量に使用する五重塔にふさわしい造りといえます。

建長４年 12 月、西大寺（さいだいじ）流律宗（りゅうりっしゅう）の高僧忍性（にんしょう）が東国への布教のために常陸を訪れ、翌年７月には忍性による結界が般若寺で行われました。これ以後、鎌倉や奈良の新たな文物・技術がもたらされ、寺容は大きく整備されていきます。五重塔の造営も、律宗寺院としての伽藍（がらん）整備の一環であったと考えられます。しかし、わからないことも多くあります。当時の般若寺は現在よりも広い寺域（じいき）を誇っていたことは想像に難（かた）くありませんが、堂塔の基壇（きだん）などはこれまで確認されていません。中世の般若寺がどのような姿であり、五重塔がどのあたりに建っていたのか、これも謎のままです。

五重塔は寺院を象徴する高層建築です。桜川流域の微高地に位置する般若寺は、この五重塔がランドマークとなって遠くからでもその位置がわかったことでしょう。そこに集う僧俗の人々、周辺に広がる中世的な景観などを想像してみることも歴史の楽しみ方の一つです。　（堀部 猛）

文字瓦「五重」、「塔瓦」

２／27（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも中世コーナーに展示） ●般若寺遺跡出土資料（当館所蔵） ●西大寺光明真言結縁過去帳（複製、原資料は奈良西大寺所蔵）

２０１５年度　冬季の展示資料解説③　近世

飲み水をもとめて

―その一　土浦城と上水道―

城下町土浦はふたつの「水」に苦しんだマチです。ひとつは洪水です。何本もの支流にわかれて霞ヶ浦に落ち込んでいた旧桜川は、城の周辺では堀、マチのなかでは水路として利用されていました。上流の増水や、霞ヶ浦の逆水による洪水が起きると、数ヶ月もの間マチから水が引かなかった江戸時代の記録があります。

もうひとつは飲み水です。縦横無尽に堀や水路が走っていましたが、現在のようなコンクリート製ではないため、水は浸み込んでいきました。周辺を湖・川・沼に囲まれ水に浮かんでいるような状態のマチでは、土を掘れば泥水が湧き出ました。水に囲まれながら、飲み水に不自由していたのです。

それでは、土浦町の人たちはどのようにして飲み水を得ていたのでしょうか？ 今回は土浦城まで上水道が引かれていたことをご紹介します。

『土浦市史』（昭和 50 年）には、「真鍋の臼井から（土浦）城内に上水道をひいたのも寛文年間で数直のときである」という一文があります（349 頁）。真鍋の臼井とは、善応寺観音堂の下にある泉で別名を「照井」といい、今も水がこんこんと湧き出ています（土浦市指定文化財）。数直とは、寛文９（1669）年に土浦城主となった土屋数直（1608～79）です。上水道とは生活のための水を供給する設備で、単に水道ともいいますが、下水道と分けてこう呼ばれます。江戸時代には、水戸藩が引いた笠原水道、大都市江戸には「六上水」と呼ばれた神田上水、玉川上水、本所上水、青山上水、三田上水、千川上水があり、人々の生活を支えました。

本当に土浦城へ続く上水道が整備されたのでしょうか。それを証明するかのように善応寺と土浦城を結ぶ旧水戸街道裏道の工事中、木製の管や枡が地中から出土したのは、昭和 53（1978）年前後のことでした。

管は水を通すための樋で、樋をカギの手に継ぐ際には分水枡が用いられ、用材は腐りにくい松と推測されます。出土した水道管や分水枡は断片でしかないので、残念ながら、臼井から土浦城までほぼ１㎞の経路は判明していませんが、遠くまで汲みにいかなくても、城内にはきれいな水が流れ込んできたのです。また、上水道が利用されていたのは正徳年間（1711～16）までのおよそ 40 年間だとされています。

「水道管」と「分水枡」は土中にあって水を含んでいたため、昭和 63（1988）年から３年かけて樹脂を塗布し、水分と樹脂を置き換える作業を施しました。

次号の「霞」では、マチの人々の飲み水を支えた井戸に関する資料をご紹介します。　　（木塚久仁子）

「水道管」（当館所蔵）

「分水枡」（当館所蔵）

１／23（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近世コーナーに展示） ●秘公満律（当館所蔵） ●土屋数直「枯木鳩之図」（当館所蔵）

２０１５年度　冬季の展示資料解説④　近代

土浦中学校での軍事教練

―戦時下の軍隊式教育―

戦前・戦中の学習科目に「教練」がありました。軍事に関する教育や訓練を行なうもので、大正 14（1925）年の「陸軍現役将校学校配属令」により、一定の官立、又は公立の学校に陸軍の現役将校が配属され、土浦市内では土浦中学校（現茨城県立土浦第一高等学校）で実施されています。

昭和 18（1943）年４月に土浦中学校へ入学した屋口正一さん（石岡市在住）は、手記の中で中学生活と教練について次のように記しています。

> 「軍隊式」、これが中学生活の骨組をなしており、その最高の精神的規範が「軍人勅諭」であった。忠節、礼儀、信義、武勇、質素が教練徳目の真髄をなしたのである。「気ヲ付ケ」「休メ」「歩調トレ」「歩調止メ」「頭右」「直レ」すべて号令で動いた。生徒は教師に下級者は上級者に、敬礼するのが絶対的遵守事項であった。教師には「停止敬礼」をもって、先に発見した者が「敬礼」の号令をかける事になっていた。（後略）

軍隊の精神教育の基礎である「軍人勅諭」を暗記し、不動の姿勢にはじまる訓練、「アリマス言葉」の使用、ルールに基づく歩き方、銃剣術・軍歌演習・戦史戦訓の講話など、週３回ほどの教科ではありましたが、軍隊式の教育は、中学生に大きな影響を与えました。屋口さんは「教練で２年半鍛えられた。絶えず社会の動向に目を向けるといった、生きていく上で大切なことも学校教練の中で学んだ」と語っています。

学生・学徒の軍需工場への勤労動員が次第に強化されるなか、昭和 19 年７月には中学４、５年生が通年動員で市内の東京電機と中村鉄工所へ、20 年１月には３年生が第一海軍航空廠へ動員されました。校内は空き教室が目立ち、屋口さんら２年生が学内で最上級生という異例の事態になります。教練はより実践的な内容に変化し、本来高学年が行う本物の銃を携行しての訓練もありました。「４kg はあるズシリと重い銃を真冬の寒空のなか扱った時の冷たさ、緊張感と圧迫感は忘れない」と屋口さんは語っています。

昭和 20 年３月には屋口さんら２年生も第一海軍航空廠へ動員となり、終戦までの５ヶ月間動員学徒として働くことになりましたが、その間配属将校による出張教練もありました。

太平洋戦争終結後、「陸軍現役将校学校配属令」は 20 年 11 月に廃止となり、学校教練とともに生徒のゲートル姿も先生、及び上級生への敬礼も終わりを告げました。（野田礼子）

参考文献：『桜水物語　戦中派の中学時代』（屋口正一著）

◀連合訓練のようす
『茨城県土浦中学校第四十回卒業記念写真帳』（昭和十五年）より

▶銃剣術に使用された木銃
（屋口正一氏所蔵）

３／５（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近代コーナーに展示） ●教練で使用された背嚢（屋口正一氏所蔵） ●自転車所有者之証（第一海軍航空廠通勤用）（当館所蔵） ●巻脚絆（ゲートル）（当館所蔵）

市史編さんだより

「土浦在城中覚日記」―土屋篤直の日記から　再び―

「霞」第 22 号で「土浦在城中覚日記」（国文学研究資料館所蔵　常陸国土浦土屋家文書）から、土浦藩土屋家４代藩主土屋篤直（1732～1776）の土浦滞在中、土浦と江戸屋敷を行き来する品物についてご紹介しました。今回は、土浦滞在を終え江戸へ帰った時の様子について取り上げてみたいと思います。

宝暦８（1758）年９月 13 日から土浦に滞在していた篤直は、11 月 21 日江戸へ向けて出立します。23 日朝五ツ時過（午前９時頃）に千住の宿を出発し、上野を通ってその足で参府の挨拶回りが始まります。堀田相模守を訪ねた時の記録を見ますと

「右表門より罷越通り御用番ニ付公用人へ逢候而、今日参府仕候ニ付御届之口上申述候口上書相渡、夫より又側用人へも逢見廻候口上申述、何も様御安否も承知仕度旨口上申述申置、又表門より罷立帰ル」

とあります。

表門から入り公用人に参府の口上を述べ、口上書（江戸へ戻った旨の簡単な挨拶文）を渡し、側用人にも会い、先方の安否を尋ね、表門から帰っています。このように主人には会わず用人に口上を述べ、さらに口上書を渡した老中や奏者番などの屋敷が、他に 14 軒ありました。その後昼九ツ半時過ぎ（午後１時頃）にようやく自分の屋敷へ到着します。そして奥で待っていた御隠居様（亮直カ）へ挨拶をし、妻登恵子などにも久々に会い、夕御膳でゆっくりするのです。また翌日夕方に御隠居様を訪ねてお酒を楽しみました。

翌 25 日には堀田相模守を改めて訪ねて主人に会い、参府のお礼を述べています。続いて秋元但馬守を訪ね、お礼を述べ話をしています。主人に会うときには 23 日とは違って裏門から入っています。

12 月８日は寒に入り、老中・若年寄衆・御側の者などへ例年の通り使いの者を遣わし、近親者へは手紙等で、寒入り見舞をしています。

14 日には、登城予定の 15 日は風邪により登城が困難なため、代わりの者に参府御礼の献上品を届けさせることを松平右近将監（御用番）と但馬守に伺い、御目付衆や近親者へもこの件について知らせています。登城当日の 15 日に使いの者が登城し献上品を差し上げたところ「受け取り滞りなく献上した」という奏者番の当番であった内藤大和守からの言葉を、帰宅した使いの者から聞いています。さらにこの経過を老中や若年寄・御側衆などへ報告しました。

25 日には松平右近将監の屋敷を訪ねて、休んでいた間の失礼を詫びお礼を述べ、風邪が治り今日から出勤したことを伝えています。さらに堀田相模守他５軒を訪ね、用人に同様の口上を述べ、口上書を置いて帰りました。

27 日には、歳暮の祝儀のために、25 日に訪ねた屋敷も含め 24 軒の屋敷を回っています。

このように御機嫌伺いにどれほどの時間と労力を費やしていたかが、詳細に書かれているためとてもよくわかります。この他に公務や各種行事などがあり、多忙な様子がうかがえます。

篤直は、父陳直が 40 歳で没したため３歳で家督を継ぎました。初めて土浦への帰城が許されたのは 19 歳の時です。土浦在城中は小松茶屋(現在の小松の二十三夜尊の傍らにあった垂松亭。篤直が宝暦２年に建てた小さな庵)で酒などを楽しみ、中貫原での遠的射、常名・虫掛・木田余・手野などでの狩りの様子も詳しく記されており、篤直が楽しそうに馬を走らせている姿が目に浮かぶようです。自然に囲まれた土浦領では、儀礼尽くめの日常から解放された時間を堪能していたと思われます。

（市史編さん係非常勤職員　海老原麻里子）

地域と博物館

博物館と展示（１）　～常設展示の考え方～

開館時の常設展示（平成 19 年にリニューアルしています）については、検討を始めた昭和 60 年頃、教科書のように時代を追って解説する通史展示にするか、あるいは特色ある地域性や所蔵資料を活かしたテーマ展示にするかがまず課題となりました。土浦市は、内海である霞ヶ浦に面し、原始古代からその豊かな水産資源を利用して人々の暮らしが営まれてきました。また、近世には、譜代大名土屋氏９万５千石の城下町として栄えていた歴史的背景があります。十分とは言えない所蔵資料の多くが、考古資料と近世資料に偏在していたことから、通史展示よりむしろテーマ展示に適しているという状況がありました。

テーマ展示は、地域博物館にとっては、地域の特色を主張するのにふさわしい展示方式です。しかし、テーマ展示を採用する他館の事例を見ると、テーマのまとまりを強調するために展示室を分割している館が多いのに対し､当館の場合は総面積 300 ㎡の小規模な展示室のみである難点がありました。また、テーマ展示自体が児童生徒にとっては理解しづらいのではないかとの印象を受けたことなどから、資料的に手薄な中世や近現代に不安が残るものの、原始古代の考古資料と近世資料に重点をおいた通史展示の形をとることになりました。なお、実物資料が時代的に偏っている問題については、子供たちにも理解しやすくなることから、模型やレプリカ、映像などの手法をつかってそれを補うこととしました。これは、従来の博物館がともすれば個々の展示品の価値に重きを置いて「飾り」･「見せる」美術系博物館が多かったのに対し、多様な手法を使って展示のなかにも教育的な要素を加えていこうという考え方で、当館よりも５年前に開館した国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）が参考になりました。

展示の流れは、導入から始まり、時代順に原始・古代、中世、近世、近代、現代の計６つに分け、それぞれ「土浦の大地と歴史」、「土浦のあけぼの」、「武家社会のはじまり」、「江戸時代の土浦」、「近代土浦のあゆみ」、「躍進する土浦」のタイトルをつけました。時代ごとに小項目を設定し、地域を特徴付けるトピック的な内容も盛り込むよう心がけました。また、展示内容を考えるにあたり、土浦地域だけを取り上げるのではなく、広域な視点で展示を考えようということで、展示資料をかならずしも土浦市域に限らなかったことも当館の特徴のひとつといえます。土浦地域の歴史を時代の流れに沿って紹介する手法は、地域の歴史全般をひととおり漏れなく紹介できる長所があります。しかし一方では、時代順で教科書のように展開する展示構成のため、地域色が不鮮明になりがちです。これについては、開館後に特別展などの展覧会を積極的に開催し、地域の特性を発信していくこととしました。

（塩谷　修）

開館時の常設展示室の様子

実物資料を展示できないものは、
レプリカを展示しました

霞短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、子ども用はたおり機を製作してくださった杉山潔さんに寄稿していただきました。

子ども用はたおり機の製作

土浦市立博物館が毎年実施している「小学校校外学習」や夏休みの「親子はたおり教室」では、子ども達がはたおり機や織り布の仕組みを知ることができ、先人が如何(いか)に苦労して布を手にしてきたかが体験できます。また、これらのはたおり機を使用した学習は、現在のリサイクルに相当する「裂(さ)き織り」の織り方をつうじて、もったいない精神や物を大切にする気持ちを育むこともできる素晴らしい体験学習の場だと思っています。

子ども用はたおり機ができる以前は、博物館で使用されていた機(はた)はすべて大人用であり、特に低学年の子どもには操作が難しい状況でした。また、縦糸を上下交互に交差させる「ふみ木」に足が届かず、横から大人が踏み込んでやる必要があり、一人で織り上げることはできませんでした。そこで、子供専用のはたおり機を作ろうということになりました。

子ども用はたおり機を製作するにあたっては、主に次の点に配慮しました。①昔の人が使用していた、はたおり機の形や機能をできるだけ忠実に再現する、②「ふみ木」を十分踏み込めるよう、腰掛部の高さを約10㎝低くする、③操作を軽くするため、筬(おさ)及び筬柄(おさづか)の幅を約10㎝狭くする、④本体の縦、横、高さをおおむね10㎝ずつ短くする。

子ども用はたおり機の初織りは小学１年生の女児でしたが、すぐに慣れ、一人でオリジナルのランチョンマット大の布を上手に織り上げました。その誇らしく満足そうな様子を見ていて、当方も感激しました。設計から完成まで10ヶ月程かかりましたが、苦労が報われた気がしました。民具を使った体験学習では、先人の知恵や苦労、喜びといったものが体感、体得できるのではないかと思っています。土浦市立博物館の益々の活躍を願い、当方も微力ながら協力させて頂きたいと思っております。

（こども用はたおり機製作者　杉山　潔）

コラム(33)市役所までの路地裏

土浦市役所が下高津の高台から土浦駅前にやって来ました。遅ればせながら、私も 10 月後半になり、事務処理のため教育委員会まで行くことになりました。天気も良い日でしたので、歩いて行くことにしました。できるだけ直線ルートでと思い、そびえるソリッドタワーを目指して亀城公園の旧前川口門から不動院脇の細路地をとおり、通常中城通りから駅前通りに出てしまうところですが、まちかど蔵「大徳」脇の路地を進みました。そして、ツタの絡まる高架道の下をくぐり、土浦名店街を横目に旧パチンコ横丁を経て市役所の入るウララに到着しました。およそ15分間の移動でした。

このルートは、自分がこれまで歩いたことのない路地裏の道でした。１年半の博物館勤務のせいか、旧野村桂之助邸のレンガ蔵やまちかど蔵「大徳」の屋根に見える「鍵大」、そして色川三郎兵衛醤油醸造所跡地などが目に留まります。

些細な知識ではありますが、そのおかげで、まちの中を歩いた時の見え方や感じ方も異なってくるように感じる今日この頃です。（関口　満）

情報ライブラリー更新状況

【2016・１・５現在の登録数】

古写真　552 点（＋５）
絵葉書　464 点（＋５）

※（　）内は 2015 年 10 月 1 日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。１ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ）　２０１５年度
冬季展示室だより（通巻第３３号）
編集・発行　土浦市立博物館
茨城県土浦市中央１－１５－１８
ＴＥＬ　０２９－８２４－２９２８
ＦＡＸ　０２９－８２４－９４２３
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php？code=43
１～５ページのタイトルバック（背景）は、博物館２階庭園展示です。

2015 年度冬季展示は、**2016 年１月５日（火）～３月 11 日（金）**となります。「霞」2016 年度春季展示室だより（通巻第 34 号）は**５月 14 日（土）発行予定**です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。（カラー）